

No.

大森テニスクラブ
Omori Tennis Club

[トップページ](#)
[クラブご案内](#)
[入会方法](#)
[アクセス](#)
[クラブ写真集](#)
[クラブの歴史](#)
[クラブイベント](#)
[入会のお問い合わせ](#)
[メンバーページ](#)



クラブの歴史

大森テニススクール
大森テニスエンタープライズ



3年以上レッスンを受けているスクール生を対象に特別優遇入会制度のご案内です！

メンバーログイン

アカウント

パスワード

クラブの歴史

大森テニスクラブが誕生したのは大正12年です。



明治天皇の御発意により「臣民は文武両道に励むべし」との主旨の一端を担うべく、弓道、剣道に代わる近代武道の一つとして、小銃射撃を国民に奨励せしむべしと、明治15年(1882年)、西郷従道(ツグミチ-西郷隆盛の実弟)らが本郷の向が丘に、一般の人に小銃射撃の訓練を奨励する目的で実弾射撃場を創設、後に、ここ大森村の約14,500坪の土地へ移転し、日本帝国小銃射撃協会と改称したことに遡ります。小銃射撃の演習を国民一般に誘導し尚武の気風を鼓舞する目的で、明治天皇のもとに射撃演習も数々なされた記録にあります。年月日の記録は残っていませんが、大正の初期に西洋列強の文化の中で育まれたスポーツマンシップも全うしようと、教式用1面、硬式用1面の計2面のテニスコート敷地内に設けました。それがテニスクラブに進展したのは、慶應義塾大学庭球部が協力を依頼してきたことに端を発していると言われてます。



慶應義塾大学は他校に先駆けて庭球部を創設しましたが、安定した練習出来るコートがなく苦慮していたこともあり、また良いコートがあっても当協会に協力を求めてきました。当協会はスポーツマンシップの啓発の要として、テニスの振興は特にこれからの日本の若い人達に極めて重要と、それを快諾しました。早速、コート5面を1面にまで増設し、慶應義塾が参画したテニスクラブとしての環境が整い、慶応大学の庭球部と一般のテニスクラブが一緒になったユニークで斬新なテニスクラブ「大森庭球倶楽部」が開設されました。それは大正12年のことです。

このようなあり方は慶應義塾大学が昭和12年、横浜の吉日に移転するまで続きました。それまでに周囲も宅地化が進み、実弾射撃には適さない場所となったため、敷地の三分の二を分譲地とし、テニスコートだけを残して射撃場は鶴見の北寺尾に同年移転しました。その後、運営はテニスを中心として独自に行い、平和的スポーツ、テニスの振興を主目的とした大森テニスクラブの現在の姿が明確となった時期でもあります。



エピソードとしては、当時のボールは輸入品だったので会員にとってはとても高価なもので、草むらの多いこのコートではボールがよく無くなり、会員よりもその負担が大変だったという苦労話をよく耳にしました。また、当時、空閑地には桜が植えられ、桜林の中のテニスは世の平和を願うスポーツマンシップに相応しく、素晴らしいもので、早慶戦をはじめ幾多の名を獲す大会がこの桜吹雪の中で行われました。多くの有名な先輩選手、会員の方々が言い伝え、書き記す名場面はこの桜のことが多く言われています。大木となった桜の木は、いま一本となりましたが、この大森テニスクラブの永い歴史を今もじっと見つめています。

大森テニスクラブ

HOME 銃のページ トランプ射撃 日本の射撃

HOME 銃のページ トランプ射撃 日本の射撃

銃の歴史

- M1911ギャラリー
- M1911の構造
- M1911のメーカー
- 銃刀法(銃)
- U.S.パテント
- トランプ射撃
- トランプ射撃の歴史
- 日本の射撃**
- 話題

序論(Introduction)



トランプ射撃(Trap shooting)は18世紀後半にイギリスで開発されたと言われています。最初のターゲットは、生きた鳥で、ライブ・ビジョン・シューティング(Live Pigeon Shooting)と呼ばれました。トランプとして知られているケージのフタの部分が地表から見えるように地面に埋め、その中に生きた鳥を入れます。射手はこの箱から19m離れた場所に立ちます。箱のフタには、紐が取り付けられ、フタはスライドして開く構造になっています。射手はショットガンで射撃可能な状態で待ち、鳥が飛び立つのを待ちます。プーラーと呼ばれる人が、このフタに付けられた紐を引きます。紐が引かれてフタが外れると鳥は飛び立ち、射手はその鳥を撃ちます。このゲームは、18世紀中期から後期に掛けて、英国とヨーロッパで盛んに行われるようになります。

スポーツとしては、19世紀初頭に米国で最初に行われ、19世紀半ばにはオハイオ(Ohio)州、シンシナティ(Cincinnati)、及びニューヨーク市(New York City)エリアで人気があったそうです。その後、生きたハトの希少性から、米国のトランプ射撃愛好家は人工的なターゲットを作成するようになります。

ライブ・ビジョン・シューティング(Live Pigeon Shooting)は、鳥撃も猟をスポーツの形にしたものであると同時に、クレー射撃の原点と言えます。紐は、1865年に、ロンドンのホンジーの森(Homsey wood)で行われた貴族によるビジョンシューティング(pigeon shooting)の様子。

(picture from The Illustrated sporting news.)

内容(Contents)

日本の射撃の歴史(History of the shooting of Japan)

- 1873年~4年(明治6年~7年)、神奈川県横浜郡生見尾村(うみおむら)字鶴見二見堂(現、横浜市鶴見区鶴見1丁目)で放鳥射撃場が開設され、初期は不明ですが後に児島惟謙(こじまこれかた)氏が会長となります。
- 1877年(明治10年)、東京府荏原郡入新井村(現、東京都大田区山王2丁目)で放鳥射撃場が開設され、大村純英(おむらすみひで)伯爵が会長となります。
- 同年1月10日、上野公園射撃場の代替地として、東京共同射撃会社射撃場が、東京府本郷区向ヶ岡弥生町(現、東京都文京区弥生2丁目 東京大学内)に、警視局(現、警視庁)の射撃場として開設されます。
(地図は、1884年(明治17年)発行の地形図)
- 1883年(明治16年)、東京共同射撃会社射撃場は宮内省の所轄となり、同年に小松宮彰仁親王を会長とする東京共同射撃会社(射撃協会)が設立され、皇宮地附属地(帝室財産)の東京共同射撃会社射撃場となります。
- 1888年(明治21年)5月30日、横浜放鳥射撃会発足。射撃会会長は、第8代横浜税関長の有島武(ありしまたけし)氏、副会長は吉田健三(よしたけんぞう)氏、幹事は矢野裕義(やのひろよし)氏。事務所は横浜市中区弁天通り。射撃場は神奈川県横浜郡生見尾村(うみおむら)字鶴見二見堂(現、横浜市鶴見区鶴見1丁目)。同年に第1回大会が開かれます。1909年(明治42年)に戸塚へ移転します。
- 同年、東京共同射撃会社と東京共同射撃会社射撃場は、東京府荏原郡入新井村(現、東京都大田区山王2丁目)に移転し、日本帝國小銃射撃協会となります。
- 1889年(明治22年)6月29日、日本帝國小銃射撃協会(前、東京共同射撃会社)の大森射撃場が東京府荏原郡入新井村(現、東京都大田区山王2丁目)に開場します。
(写真は、「大田区の近代文化財」より)
- 1914年(大正3年)、大森射撃場、東京府荏原郡入新井村(現、東京都大田区山王2丁目)の放鳥射撃場のみが、神奈川県横浜郡鶴見町馬場村(現、横浜市鶴見区馬場町)に移転し、帝國獵友射撃会場となり帝國獵友会の管轄となります。
(地図は、1934年(昭和9年)発行の地形図)
- 同年、放鳥射撃からクレー射撃となり、神奈川県横浜郡鶴見町東寺尾村(現、横浜市鶴見区東寺尾町)にて、日本におけるクレー射撃の第1回全国射撃大会がハンド・トランプ(Hand Trap)にて開催されます。

- 1922年(大正11年)、第1回全日本クレー射撃選手権、トランプ競技が獵友会主催で行われます。
- 1925年(大正14年)、學生射撃聯盟(學生射撃連盟)が結成されます。会長は山川機次郎氏。
- 1929年(昭和4年)9月26日、大日本獵友会が、野生鳥獣の保護、狩猟事故・違反防止対策などの活動、日本国内における狩猟者のための共済事業を行うために創設されます。2012年(平成24年)4月1日から一般社団法人に移行します。
- 1937年(昭和12年)、日本帝國小銃射撃協会は、學生射撃聯盟(學生射撃連盟)及び、他の一般団体と合併し、大日本射撃協会が設立されます。会長は奈良武次氏。
- 同年、大森射撃場は、周囲の宅地化により敷地の2/3を分譲地とし、テニスコートだけを残して射撃場は鶴見の北寺尾に移転し、現在は、大森テニスクラブになっています。
- 1949年(昭和24年)、大日本射撃協会の改組により日本クレー射撃協会が誕生します。

Copyright © 2014 Pichori. All Rights Reserved.

No. _____ Date _____

東京共同射的會社射撃場 紹介サイト

文京区ライフル射撃協会 Tokyo Bunkyo RIFLE Association

非公式WEBサイト

ホーム	協会の紹介	文京区の由緒	射撃競技の紹介	リンク集	お問い合わせ
小石川トンネル射撃場	小石川エア・ライフル射撃場	東京共同射的會社射撃場			

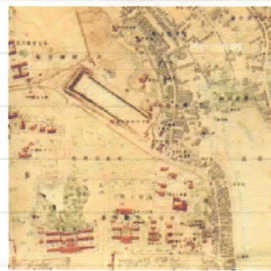
ライフル射撃界の由緒ある地、文京区

□ 東京共同射的會社 射的場

この地は水戸藩の江戸中屋敷があった場所である。明治2年(1869年)に新政府によって東京帝国大学(現:東京大学)の為の用地として公収された。

明治9年(1876年)に警視局(現:警視庁)の射的場として建設が開始され、明治10年(1877年)に開場した。
(当時は射撃練習用の場所を射的場と称したらしい)

明治15年(1883年)に宮内省の所轄となり、同年に小松宮彰仁親王を会長とする東京共同射的會社(会社=協会)が設立され、皇宮地附屬地(帝室財産)の東京共同射的會社射的場となった。
以降、明治天皇の行幸が度々行われ、陸軍や警視庁、上流階級の者などによる射的会が行われていた。



明治17年頃(1884年)

明治21年(1888年)に会社と射的場は大森の山王に移転し、日本帝国小銃射的協会となった。

日本帝国小銃射的協会は、昭和12年(1937年)頃に學生射撃聯盟(大正14年(1925年)山川健次郎博士を会長として結成)を主軸とした他の一般団体と合併し、大日本射撃協会(会長:奈良武次)が設立された。

射的場の移転後は本格的な宅地化が行われ、言問通りが延長されて明治27年(1894年)頃には新たな坂が開かれ、この坂は地名をとって「弥生坂」と名づけられた。



平成22年頃(2010年)

また、射的場跡地の傍らを通ること、この坂の下にはかつて幕府鉄砲組の射撃場が存在したために「鉄砲坂」とも称されている。

なお、「弥生式土器」は明治17年(1884年)に文京区弥生の地で発見されたことにちなんだ名称であるが、皇宮地附屬地で立ち入り禁止であった当時の射撃場の中で発見されたのではという説もあり、発見場所は未だ明らかではない。

このサイトについて

このサイトは、文京区ライフル射撃協会々員である佐藤(陽)が、個人の責任で管理運営しております。

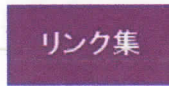
公式サイトではないため、事務局や連絡先等は公開致しません。

お問い合わせは[こちら](#)からお願い致します。

(本サイトについて)



(トップページへ)



(リンク集のページへ)

[前へ](#) (小石川エア・ライフル射撃場へ)

[次へ](#) (射撃競技の紹介へ)

[【ページ先頭へ戻る】](#) [【リンク集】](#) [【射撃競技の紹介】](#)



- ホームへ戻る -

概要 | 印刷用 | サイトマップ

[ログイン](#)

Copyright © 2011 文京区ライフル射撃協会 紹介サイト All Rights Reserved.

文京区ライフル射撃協会
Tokyo Bunkyo RIFLE Association

非公式WEBサイト

ホーム - 協会の紹介 | 文京区の由緒 | 射撃競技の紹介 | リンク集 | お問い合わせ

小石川トンネル射撃場 | 小石川エア・ライフル射撃場 | 東京共同射的富社射撃場

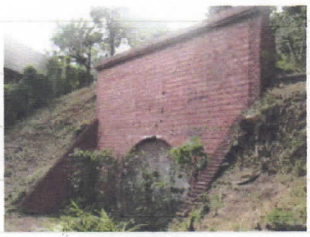
ライフル射撃界の由緒ある地、文京区

□ 小石川トンネル射撃場（旧東京砲兵工廠射撃場）

小石川トンネル射撃場は、丸ノ内線後楽園駅の横（礫川公園地下）に存在した。

かつて後楽園の一角は、水戸藩邸（江戸上屋敷）の敷地であった。

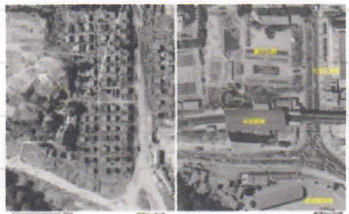
それが明治維新後に藩邸跡に東京砲兵工廠（陸軍造兵廠東京工廠）が建設され、トンネル射撃場は明治16年から18年ごろに完成されたと推定されている。



地下トンネル射撃場、射座の跡

大正天皇が皇太子であった明治19年頃の、「村田銃射的場御巡覧」の記述が文献に存在する。

その為、このトンネルは初の国産軍用小銃である村田銃の増産体制のために建設されたと考えられ、主に軍用小銃や機関銃の試射用（訓練・弾道実験等）の場所として使用されていた。



小石川トンネル射撃場付近の変遷



射撃場、門前の看板

それが昭和17年1月に社団法人日本ライフル射撃協会の前身である大日本射撃協会が、財団法人として認可されたのを機に、陸軍省を通じて近衛師団司令部から貸与されたものである。

トンネル上部を含む一帯は戦中、高射砲陣地が築かれた。現在、近辺には弾薬庫や火薬庫などの存在を伝える礎石が残っている。

戦後は食糧不足の一助としてシイタケ栽培が行われていたが、東京都との交渉が円滑に進み、スモールポアライフル射撃場に改装され、昭和25年4月2日に射場開きが行われた。

（トンネルの全長は約280mとされる。3射座で、50m地点に土手・監的壕を築き、照明や標的を設置した。後に二階建ての管理棟が建設された）



射撃場管理棟の外観

昭和27年（1952年）のヘルシンキオリンピックが行われる際には、参加の為に第1回の全日本小銃射撃大会が開催された。また、昭和29年には第1回全日本学生ライフル射撃選手権大会が開催された。昭和39年（1964年）の東京オリンピックの際には、選手強化拠点として運用された。

このトンネル射撃場には、後楽園駅からの直通路が存在し、駅から直接訪れることが可能なことや文京区役所近くの駐車場を利用できたなど利便性に優



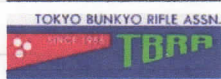
このサイトについて

このサイトは、文京区ライフル射撃協会々員である佐藤（陽）が、個人の責任で管理運営しております。

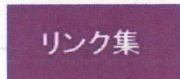
公式サイトではないため、事務局や連絡先等は公開致しません。

お問い合わせは[こちら](#)からお願い致します。

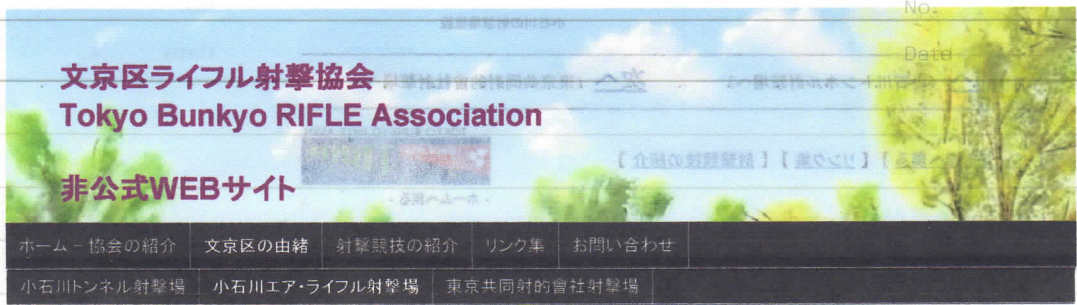
（本サイトについて）



（トップページへ）



（リンク集のページへ）



ライフル射撃界の由緒ある地、文京区

□ 小石川エア・ライフル射撃場 後楽園射撃道場

戦前のこの地は陸軍兵器学校(陸軍工学校)の剣道場であったが、昭和17年に大日本射撃協会が財団法人になった際に払い下げを受け、また敷地を借り受けて学連とともに事務所をこの地に移転した。



昭和10年頃の後楽園近辺

戦中の空襲により度々焼失の危機に直面したが、射撃協会職員の必死の防火により奇跡的に戦火を免れ、戦後は空銃射撃場に改造され、小石川エア・ライフル射撃場となった。(木造平屋)

トンネル射撃場とこの空銃射撃場を始めとした施設の急速な復旧とともに、日本射撃協会(昭和24年発足、後の社団法人日本ライフル射撃協会)や、日本学生ライフル射撃連盟(昭和28年設立)の再建も、帥尾源蔵氏(昭和36年逝去)を始めとした有志の主導で進められた。



小石川エアライフル射撃場付近の変遷

(この建物敷地内に帥尾氏が居住していた)

昭和28年に学生連盟が再建された際は芹沢新平氏(昭和56年逝去)の自宅敷地内(世田谷)に芹沢氏の自費で学連事務所が建てられた。氏の逝去後も夫人のご厚意により使用させて頂いていたが、後に後楽園射撃道場(後述)内に移転した。



後楽園射撃道場出入口の看板

この小石川エアライフル射撃場には、昭和38年まで日本ライフル射撃協会の事務所があったが、同年に原宿の岸記念体育会館内に移転し、現在に至る。

協会事務所が移転した後、小石川エアライフル射撃場は建物の老朽化によりパレス後楽園へと改築され、地下1階にエアライフルとビームライフル共用の射撃場を備えた後楽園射撃道場(昭和54年完成)として運用された。

道場では学生連盟や東京都ライフル射撃協会、日本銃砲史学会の会合等が開かれたり、主にビームライフル射撃場として学生大会や文京区民大会、体験射撃などが行われていた。後に全国デジタルスポーツシューティング大会の東京会場としても使用されたが、2009年1月に後楽園射撃道場は閉鎖され、終焉を迎えた。

(昭和38年頃の施設)

この後、日本ライフル射撃協会は事務所を小石川エアライフル射撃場から岸記念体育館内に移転。右下には後楽園球場(後の東京ドーム)が見える。



なお、地下トンネル射撃場は戦没者慰霊霊苑、中央大学後楽園キャンパスと中央大学付属高校の地下を写真のように通っているものと思われる。

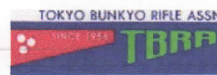
このサイトについて

このサイトは、文京区ライフル射撃協会々員である佐藤(陽)が、個人の責任で管理運営しております。

公式サイトではないため、事務局や連絡先等は公開致しません。

お問い合わせは[こちら](#)からお願い致します。

(本サイトについて)



(トップページへ)

リンク集

(リンク集のページへ)

YAHOO! JAPAN ジオシティーズ 大容量10GBのジオプラスならドメイン無料!

HIS/ソウル3日1.98万円
www.his-j.com
午前出発デラックスクラスホテルに滞在でこの価格。先着人数限定、早い者勝ち!

お店のホームページが5分で出来る!

YAHOO! JAPAN ジオシティーズ [MyStore]の詳細を見る

四通行脚

射的場

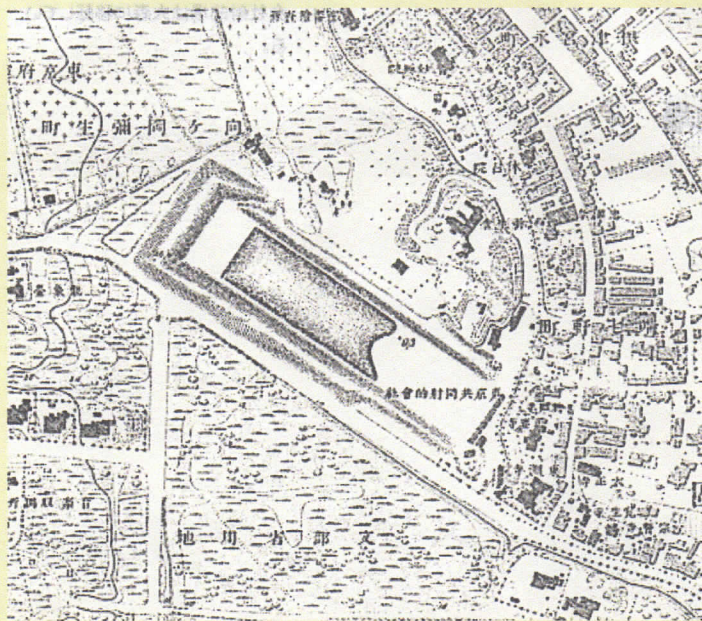
射的場

古い地図を見ていると射的場の文字が見えた。射的場 私の文字から受ける感覚は夜店や温泉地にあるおもちゃの鉄砲でコルクの弾を人形や景品に当てる遊びと思っていた。それにして遊びの射的場にしては大きすぎる。明治時代は本物の銃を使う射撃場の事を意味していたのだ。地図上の射的場は細長く白い部分が浮き上がって見えかなり目立っている。今回は現在の地図からは消えてしまった射的場を巡ってみる。



夜店の射的

東京共同射的会社射的場



東京北部 明治16年測量 5千分の1

向ヶ岡弥生町にあった東京共同射的会社射的場は明治10年(1887)に警視局(現警視庁)の射的場として開設された。明治15年



射的場跡南西側

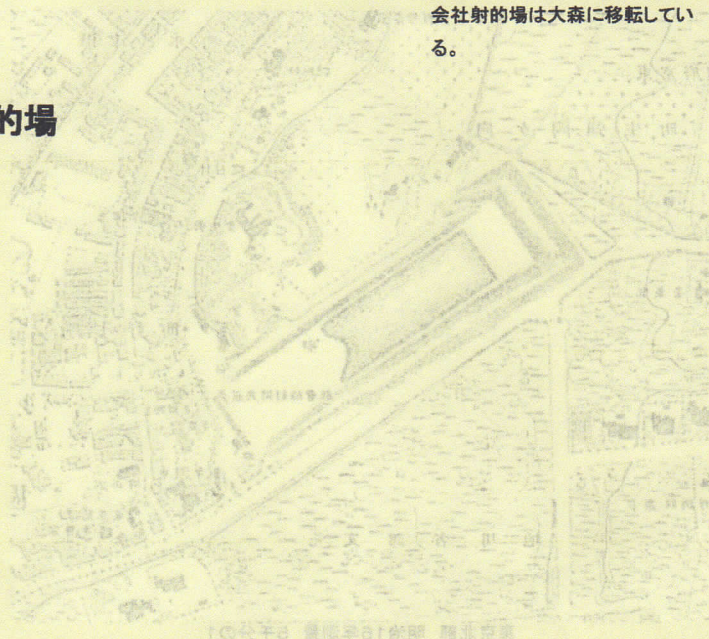


「弥生式土器発掘ゆかりの地」の碑

(1883)には宮内省所轄の射的場となり、その年に皇宮地附属地の東京共同射的会社射的場となった。設立時の発起人には西郷従道、山田顕義などの名が見える。現在跡地は東京大学浅野地区と本郷地区に挟まれた住宅地となっており、東京大学の敷地に細長く突き刺した形になっている。

東京大学工学部のある浅野地区の北西側角にはこの地で初めて発見された弥生式土器の碑が建てられている。弥生式土器の発見された場所ははっきりせず当時立ち入り禁止だった射的場の中だったのではないかとの説もある。また北側の言問通りの弥生坂はまだ射的場のあった時は出来ていなかった。弥生坂が開設されたのは明治28年(1895)で、言問通りが延長となった。何でも江戸時代坂下に幕府の鉄砲組の射撃場があったことから、この弥生坂は別名「鉄砲坂」ともいう。射的には縁の深い土地柄であったようである。そして、明治21年(1888)には東京共同射的会社射的場は大森に移転している。

大森射的場



東京共同射的会社

1887年(明治20年)設立

浅野地区(本郷区)に所在

現在(2014年)は浅野地区



東京西南部 2.5万分の1 大正6年測図



大森テニスクラブ

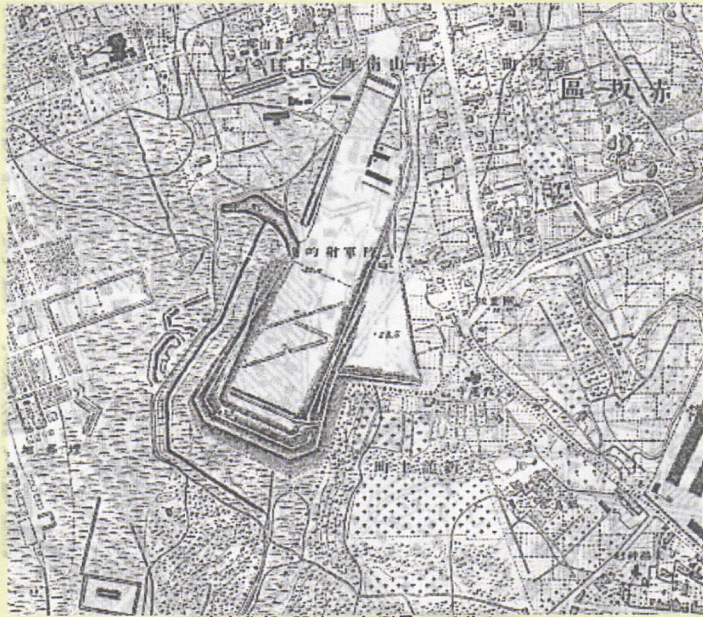


「日本帝国小銃射的協会跡」の碑

大森射的場のあった場所は大田区山王2丁目で大森駅西側の神社の脇の階段を登った所にある。跡地はテニスコートとなっており、入口付近の駐車場の角には「日本帝国小銃射的協会跡」の碑がある。この射的場は明治22年(1889年)から昭和12年(1937年)ごろまで使用されていた。敷地は窪んだところにあり谷間に作られた様で当時の状態が想像できる。

明治32年(1899)明治天皇の御下賜金200円を基金に東京府荏原郡大森村に土地を購入し日本帝国小銃射的協会が設立された。大森射的場は周囲の住宅化により昭和12年(1937)に横浜鶴見の東寺尾に移転している。

陸軍射的場(青山)



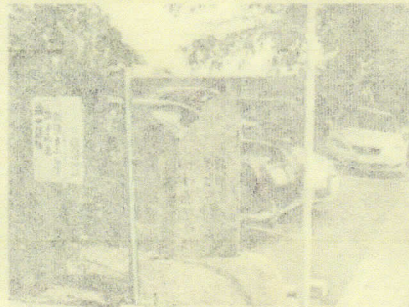
東京北部 明治16年測量 5千分の1



射的場跡東側

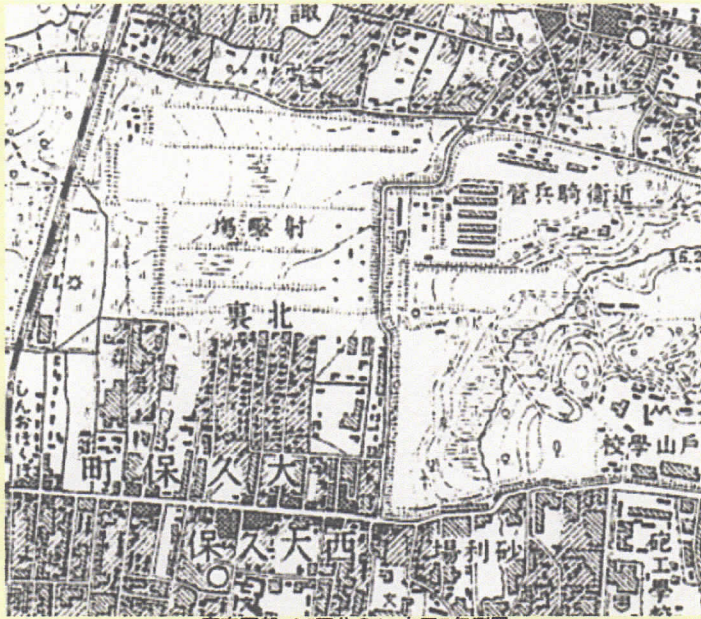
旧青山南町から旧麻布竜土町にあった陸軍射的場である。現在は住宅が建ち並び射的場があった痕跡はない。近くには第一師団歩兵第一連隊現在は東京ミッドタウン。二、二六事件の第一師団歩兵第三連隊があった。

戸山射撃場



明治16年測量 5千分の1

(山青) 射的場軍制



東京西部 2.5万分の1 大正5年測図



現戸山公園
戸山学校 戸山射撃場跡

旧陸軍の戸山学校射撃場であるが上記地図の大正5年では射的場のことはもう使用されていない。明治42年発行の1万分の1の地図においてもやはり射撃場となっている。戸山学校射撃場の出来た時期は不明であるが明治末頃にはすでに射的は使われなくなったようである。同時期の地図で射的を使用している大森射的場は明治21年の設立である。明治21年以降から明治42年までのあいだで変化があったようである。

[トップページ](#) [旧道行脚](#) [沖縄もくじ](#)

PR

すごっ! 1日約**130円**で
あの**薄毛**が!?

ベタつき
ニオイ
なし

提供: CSC

PR

初回購入のあなただけに
クーポン今すぐ使える“クーポン”つき!

＼今だけ/
ラプリー巾着も!

資生堂 エリクシール シュベリエル

Web限定 **1,188円** (税込) 送料 無料

watashi+
SHISEIDO

児島惟謙

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

児島 惟謙（こじま これかた、天保8年2月1日（1837年3月7日） - 1908年（明治41年）7月1日）は、明治時代の司法官。後述する大津事件の際には、大審院長として司法権の政治部門からの独立を守り抜き、「護法の神様」などと高く評価された。後に貴族院議員、衆議院議員、錦鶏間祇候。

幼名は雅次郎、長じて五郎兵衛、あるいは謙蔵とも称した。「児島惟謙」は後述する脱藩を機に用い始めた仮の名で、児島はこれを終生用いた。名前は「これかた」以外にも「いけん」、「これかね」などとも呼ばれる。号は天赦、字は有終。



児島惟謙

目次

- 1 経歴
- 2 児島姓に関するエピソード
- 3 脚注
- 4 参考文献
- 5 外部リンク

経歴

天保8年（1837年）に伊予国宇和島城下で宇和島藩士の金子惟彬（豊後佐伯氏の一族）の次男として出生したが、幼くして生母と生別したり、里子に出されたり、造酒屋で奉公したりと、安楽とはいえない幼少期を送った。慶応元年（1865年）に長崎に赴いて坂

生年月日 1837年3月7日

出生地 伊予国宇和郡宇和島

没年月日 1908年7月1日（満71歳没）

死没地 ● 日本 東京府

所属政党 進歩党
憲政党

憲政本党

称号 正三位

大審院長

任期 1891年5月6日 - 1892年8月24日

元首 明治天皇

貴族院議員

任期 1894年5月4日 - 1898年4月6日

任期 1905年12月13日 - 1908年7月1日

衆議院議員

本龍馬、五代友厚らと親交を結んだ。慶応3年(1867年)に脱藩して京都に潜伏し、勤王派として活動した。戊辰

選挙区	愛媛県第6区選出
任期	1898年3月15日 - 1902年8月10日



児島惟謙胸像(関西大学)

戦争にも参戦した。

1868年に出仕し、新潟県御用掛、品川県少参事を経て、1870年12月に司法省に入省。名古屋裁判所長、長崎控訴裁判所長などを経て1883年に大阪控訴院長となり、1886年には関西法律学校(関西大学の前身)創立を賛助し、名誉校員となった。

1891年に大審院長に就任し、間もなく大津事件が発生した。被告人である津田三蔵は大逆罪により大津地方裁判所に起訴されたが、総理大臣松方正義ら政府首脳が大逆罪の適用を強く主張していたこともあり、大審院は事件を自ら処理することとした。これに対して、児島は津田の行為は大逆罪の構成要件に該当し

ない(罪刑法定主義を参照)との信念のもと、審理を担当する堤正己裁判長以下7名の判事一人ひとりを説得した。結局、大審院は津田の行為に謀殺未遂罪を適用して無期徒刑を宣告した。司法権の独立の維持に貢献した児島は「護法の神様」と日本の世論から高く評価され、当時の欧米列強からも日本の近代化の進展ぶりを示すものという評価を受けた。

しかし、司法権の独立とは、単に政治部門(立法、行政)は裁判所の判断に干渉できないという司法権の外部からの独立のみを指すのではなく、裁判官一人ひとりが、同僚や上長からの干渉を受けることなく独立して判断できるという裁判官の判断の独立も含まれている。この観点から、児島は司法権の外部からの独立は守ったが、反面、裁判官の判断の独立を自ら侵害したとする見方もある^[1]。

1892年6月、向島の待合で花札賭博に興じていたとして、児島を含む大審院判事6名が告発され、時の検事総長松岡康毅から懲戒裁判にかけられた。翌7月に証拠不十分により免訴になったが、児島は1894年4月、責任を取らされる形で大審院を辞職した(司法官弄花事件)。

その後、貴族院勅撰議員(1894年 - 、1905年 -)、衆議院議員(1898年 - 1902年)などを歴任。1908年没。享年72(数え年)。

児島姓に関するエピソード

大津事件前年の1890年3月10日、本籍を北宇和郡三間村から内海村大字内海(赤水)586番戸に移している。なお、同村須ノ川には「児島」の姓が多いこと、父惟彬が金子家に養子に入る前に一時赤水の豊島家の養子に入っていたことなどが児島姓を名乗る事に繋がったのではないかと言う説もある^[2]。

脚注

- ↑ 古川純「大津事件 児島惟謙と「司法権の独立」」(法学教室121号28頁)・29頁など。
- ↑ 「新訂・内海村誌」

参考文献

- 尾佐竹猛『大津事件』岩波文庫
- 楠精一郎『児島惟謙』中公新書、1997
- 田岡良一『大津事件の再評価』有斐閣、1976

外部リンク

- 児島惟謙(こじま・これかた)と大津事件 (<http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~tamura/kojimaikenn.htm>)



児島惟謙像(宇和島城搦手門前)

先代:
南部甕男

大審院長
第6代:1891年 - 1892年

次代:
名村泰蔵



この項目は、法分野に関連した書きかけの項目です。この項目を加筆・訂正 (<https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E5%85%90%E5%B3%B6%E6%83%9F%E8%AC%99&action=edit>)などして下さる協力者を求めています(P:法学/PJ法学)。



この項目は、政治家に関連した書きかけの項目です。この項目を加筆・訂正 (<https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E5%85%90%E5%B3%B6%E6%83%9F%E8%AC%99&action=edit>)などして下さる協力者を求めています(P:政治学/PJ政治)。

「<http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=児島惟謙&oldid=52749096>」から取得

カテゴリ: 日本の大審院長 | 戦前日本の司法官僚 | 貴族院勅選議員 | 衆議院議員 (帝国議会) | 愛媛県選出の帝国議会議員 | 幕末宇和島藩の人物 | 明治時代の人物 | 伊予国の人物 | 1837年生 | 1908年没

- 最終更新 2014年9月1日 (月) 07:29 (日時は個人設定で未設定ならばUTC)。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%85%90%E5%B3%B6%E6%83%9F%E8%AC%99> 2014/09/26

清浦奎吾



出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

清浦 奎吾（きょうら けいご、1850年3月27日（嘉永3年2月14日） - 1942年（昭和17年）11月5日）は、日本の司法官僚、政治家。位階は正二位。勲等は勲一等。爵位は伯爵。幼名は普寂（ふじゃく）。旧姓は大久保（おおくぼ）。

貴族院議員、司法大臣、農商務大臣、内務大臣、枢密顧問官、枢密院副議長、枢密院議長、内閣総理大臣などを歴任した。

目次

- 1 概要
- 2 生涯
 - 2.1 生い立ち
 - 2.2 山縣有朋の側近に
 - 2.3 政界入り
 - 2.4 大命降下
 - 2.5 清浦内閣
 - 2.6 内閣総理大臣退任後
- 3 著作
- 4 親族
- 5 栄典
- 6 備考
- 7 補注
- 8 関連項目
- 9 外部リンク

概要

肥後（熊本県）出身。司法官僚を経験後、貴族院議員となり司法大臣、農商務大臣、枢密院議長を歴任。1924年

● 日本の政治家

清浦 奎吾

きょうら けいご



礼装を着用した清浦

<p>生年月日 1850年3月27日 （旧暦嘉永3年2月14日）</p> <p>出生地 ● 日本 肥後国鹿本郡来民村</p> <p>没年月日 1942年11月5日（満92歳没）</p> <p>死没地 ● 日本 静岡県熱海市</p> <p>出身校 咸宜園</p> <p>前職 司法次官</p> <p>所属政党 研究会</p> <p>称号 正二位 勲一等 大勲位菊花大綬章 伯爵</p> <p>配偶者 清浦練子</p>	<p>内閣府 司法省 農商務省 内務省 枢密院 貴族院 衆議院 枢密院議長 枢密院副議長 司法大臣 農商務大臣 内務大臣 内閣総理大臣</p>
--	---

(大正13年)に組閣したが、ほぼ全閣僚を貴族院議員から選んだため(超然内閣)、護憲三派が激しく非難。わずか5ヶ月で総辞職した。清浦首相時代は、大正デモクラシーが最も高揚した時代でもあった。

生涯

生い立ち

清浦奎吾は嘉永3年(1850年)2月14日、肥後国鹿本郡来民村(現・山鹿市)の明照寺住職・大久保了思の五男に生まれ、後に清浦の姓を名乗った。清浦は慶応元年(1865年)から、豊後国日田で、漢学者・広瀬淡窓が主催する咸宜園に学び、日田で知り合った野村盛秀が埼玉県令に任ぜられると、野村を頼って上京し、1873年(明治6年)、埼玉県14等出仕となった。

1876年(明治9年)には司法省に転じ、検事、太政官や内務省の小書記官、参事院議員補などを歴任するが、この間に、治刑法(今日の刑事訴訟法)の制定に関与した。このため、警視庁などから治刑法の講義を依頼され、それが『治刑法講義随聴随筆』という本にもなり、広く警察官に読まれたという。(全6章:博聞社2分冊、1881年-82年)

山縣有朋の側近に

こうした活躍が、当時内務卿であった山縣有朋の目にとまり、1884年(明治17年)、全国の警察を統括する内務省警保局長に、34歳の若さで異例の抜擢を受けた。清浦の警保局長在任期間は7年間の長期に及んだが、その在任期間中の内務大臣は、5年余りが山縣であった。そして、この間に得た山縣の信頼を背景に、清浦は出世の階段を順調に上ることになる。

サイン



● 第23代 内閣総理大臣	
内閣	清浦内閣
任期	1924年1月7日 - 同6月11日
天皇	大正天皇
● 第6-9-11代 司法大臣	
内閣	第2次松方内閣 (6) 第2次山縣内閣 (9) 第1次桂内閣 (11)
任期	1896年9月26日 - 1898年1月12日 (6)
任期	1898年11月8日 - 1900年10月19日 (9)
任期	1901年6月2日 - 1903年9月22日 (11)
● 第19-20代 農商務大臣	
内閣	第1次桂内閣
任期	1903年7月17日 - 1906年1月7日
● その他の職歴	
● 第24代 内務大臣 (1905年9月16日 - 1906年1月7日)	
● 第12代 枢密院議長 (1922年2月8日 - 1924年1月7日)	
● 貴族院議員 (1891年4月9日 - 1906年5月17日)	

政界入り

1892年(明治25年)、第2次伊藤内閣のもとで山縣が司法大臣に就任すると、司法次官に任ぜられた。さらに、第2次松方内閣、第2次山縣内閣、第1次桂内閣のもとでは司法大臣などを歴任した。一方で1891年(明治24年)4月9日には貴族院勅選議員に任じられ^[1]、翌年より貴族院の会派の一つであった研究会に所属する。実務に明るい清浦はたちまちのうちに代表者とみなされるようになり、以後枢密顧問官に転じる^[2]1906年(明治39年)まで研究会を率いてここを貴族院における親山縣・反政党勢力の牙城にするとともに、伯爵以下の議員の互選に際しても選挙運動で活躍して研究会を第1会派に育て上げた^[3]。

大命降下

1914年(大正3年)、シーメンス事件のあおりで倒れた第1次山本内閣の後を受けて、清浦は組閣の大命を受けたが、海軍拡張について調整がつかず、海軍大臣を得られずに大命を拝辞した。鰻井の香のみ嗅いで食べさせてもらえなかったとして、世間ではこれを「鰻香内閣」と呼んだ。また、これより前の1906年(明治39年)から枢密顧問官に、1917年(大正6年)には枢密院副議長となっていた清浦は、1922年(大正11年)2月に山縣が没すると後任の議長に就いた。そして翌年第2次山本内閣が虎ノ門事件で総辞職すると、総選挙施行のため中立的な内閣の出現を望む西園寺公望の推薦によって、組閣の大命は再び清浦のもとに降下した。

清浦内閣

しかし、かつて清浦が貴族院議員として所属した貴族院会派の研究会が組閣をリードし、外務大臣と軍部大臣(当時は軍部大臣は将官を当てる規定があり、外務大臣も外交官出身者の就任が多かった)以外の全ての閣僚に貴族院議員を充てたことから、新聞や政党はこれを清浦「特権内閣」と攻撃した^[4]。清浦は加藤友三郎、山本権兵衛に続いて三人目の非政党首班だったが、加藤友三郎内閣には少なくとも三人の大臣が交友倶楽部(政友会の貴族院における会派)から入っており、また第2次山本内閣は総理と陸海大臣以外の全大臣を政友会議員または政友会系の官僚で占めるという事実上の政友会内閣だったのに対して、清浦内閣では貴族院枠7のうち研究会が3、他会派が3、無所属が1と言う配分であり、明らかに研究会を与党とする内閣であった。そのため政権発足から数ヶ月もすると衆議院の政友会、憲政会、革新倶楽部の三会派(いわゆる護憲三派)によって組織的な倒閣活動が始まった。これが第二次護憲運動である。



内閣総理大臣に就任したころの清浦

この陰で、政友会の床次竹二郎一派149名は脱党し、政友本党を結成して清浦内閣の与党となった。その一方で、研究会の勢力拡大とその党派性の強い議会運営に反感を抱いていた「幸三派」と呼ばれる反研究会勢力による貴族院内での清浦批判も勢いづいた。これを受けて清浦は議会内外における護憲三派の行動などを理由に衆議院を解散したが、これは「懲罰解散」と呼ばれ、各層の反感を買った。選挙の結果、護憲三派は合計で281名が当選、一方で与党の政友本党は改選前議席から33減の116議席となった。清浦はこの結果を内閣不信任と受けとめ、「憲政の常道にしたがって」内閣総辞職した。5ヵ月間の短命内閣であった(もともと、清浦を推挙した西園寺から見れば、清浦内閣は選挙管理内閣でしかなかったのであるから、その役目は果たしたと言える)。

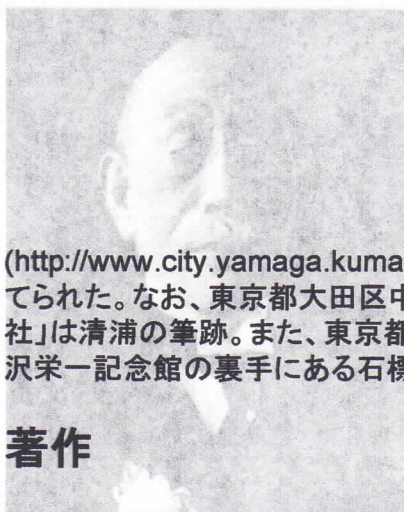
内閣総理大臣退任後

その後、清浦は重臣に列し、新聞協会会長なども歴任した。1941年(昭和16年)の重臣会議で東條英機の後継首相擁立を承認したのを最後に政治活動から引退^[5]。1942年(昭和17年)11月5日、92歳の長寿を全うした。

1992年(平成4年)に、清浦の生家山鹿市鹿本町明照寺の隣に清浦記念館



妻の清浦練子(右)と



著作

著書に1899年(明治32年)に明法堂から出された『明治法制史』(復刻信山社出版、2003年)があり、晩年の1938年(昭和13年)には口述筆記で『奎堂夜話』を今日の問題社で刊行。1935年(昭和10年)に『伯爵清浦奎吾伝』上下巻が、徳富蘇峰監修で出されている。

親族

- 妻: 清浦錬子(教育家)
- 長男: 清浦豊秋(実業家)
- 八男: 清浦末雄(陸軍少佐)
- 玄孫: 清浦夏実(女優・歌手)

栄典

- 1902年(明治35年)2月27日 - 男爵。
- 1903年(明治36年)12月26日 - 勲一等瑞宝章。
- 1906年(明治39年)4月1日 - 勲一等旭日大綬章。
- 1907年(明治40年)9月21日 - 子爵。
- 1920年(大正9年)9月4日 - 勲一等旭日桐花大綬章。
- 1928年(昭和3年)11月10日 - 伯爵。
- 1942年(昭和17年)11月5日 - 大勲位菊花大綬章。

備考

- 茅ヶ崎や小田原、京都に別荘を所有した。

補注

1. ^ 『官報』第2330号、明治24年4月10日。
2. ^ 清浦の枢密顧問官就任の背景には清浦が自分に代わる山縣閣の首相候補になることを恐れた桂太郎が、清浦をその勢力基盤である貴族院から追い出すためであったと言われている。(尚友倶楽部「貴族院の会派研究史 明治大正編」(1980年)がこの説を採る)
3. ^ 1906年5月17日に貴族院議員を辞職。『官報』第6863号、明治39年5月18日。
4. ^ なお、支持基盤ゆえに特権内閣と呼ばれたが、清浦は内閣制度成立後はじめての武士・公家以外の出身の首相である。
5. ^ もっとも、これ以前の重臣会議にも高齡ゆえほとんど出席していない。なお、清浦が出席したことで、前首相でありながら病欠した近衛文麿は「その病気というのは91歳の清浦より悪いのか?」と批判されることになった。

関連項目


- **さいたま市立七里小学校** - 清浦が初代校長を務めた。

外部リンク

- 歴代総理の写真と経歴 (<http://www.kantei.go.jp/jp/rekidai/souri/23.html>)
- 清浦奎吾 近代日本人の肖像 (<http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/67.html?c=0>)
- 清浦記念館 (<http://www.museum.pref.kumamoto.jp/link/museum/north/kiyoura.html>)

- ふるさと寺子屋での記念館長の案内、関連サイト
(http://kumanago.jp/benri/terakoya/?mode=063&pre_page=4)

公職		
先代: 山本権兵衛	● 内閣総理大臣 第23代:1924年1月7日 - 同6月11日	次代: 加藤高明
先代: 山縣有朋	● 枢密院議長 第12代:1922年2月8日 - 1924年1月7日	次代: 濱尾新
先代: 芳川顕正	● 枢密院副議長 第5代:1917年3月20日 - 1922年2月8日	次代: 濱尾新
先代: 芳川顕正	● 内務大臣 第24代:1905年9月16日 - 1906年1月7日	次代: 原敬
先代: 平田東助	● 農商務大臣 第19-20代:1903年7月17日 - 1906年1月7日	次代: 松岡康毅
先代: 芳川顕正 大東義徹 金子堅太郎	● 司法大臣 第6代:1896年9月26日 - 1898年1月12日 第9代:1898年11月8日 - 1900年10月19日 第11代:1901年6月2日 - 1903年9月22日	次代: 曾禰荒助 金子堅太郎 波多野敬直

歴代内閣総理大臣								
第22代 山本権兵衛			第23代 1924年1月7日 - 同6月11日			第24代 加藤高明		
伊藤博文	寺内正毅	濱口雄幸	阿部信行	片山哲	三木武夫	宮澤喜一	安倍晋三	
黒田清隆	原敬	犬養毅	米内光政	芦田均	福田赳夫	細川護熙	福田康夫	
山縣有朋	高橋是清	齋藤實	東條英機	鳩山一郎	大平正芳	羽田孜	福田康夫	
松方正義	加藤友三郎	岡田啓介	小磯國昭	石橋湛山	鈴木善幸	羽田孜	麻生太郎	
大隈重信	清浦奎吾	廣田弘毅	鈴木貫太郎	岸信介	中曾根康弘	村山富市	麻生太郎	
桂太郎	加藤高明	林銑十郎	東久邇宮	池田勇人	弘	橋本龍太郎	鳩山由紀夫	
西園寺公望	若槻禮次郎	近衛文麿	東久邇宮	佐藤榮作	竹下登	橋本龍太郎	紀夫	
山本権兵衛	田中義一	平沼騏一郎	幣原喜重郎	田中角榮	宇野宗佑	小淵恵三	菅直人	
			吉田茂		海部俊樹	森喜朗	野田佳彦	
						小泉純一郎		

「<http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=清浦奎吾&oldid=52873083>」から取得

カテゴリ: [日本の内閣総理大臣](#) | [日本の閣僚経験者](#) | [貴族院勅選議員](#)
| [日本の枢密顧問官](#) | [明治日本の参事院関係者](#) | [戦前日本の司法官僚](#)
| [日本の内務官僚](#) | [帝国軍人後援会の幹部](#) | [帝国農会の人物](#) | [日本の伯爵](#)
| [日本の子爵](#) | [日本の男爵](#) | [熊本県出身の人物](#) | [1850年生](#) | [1942年没](#)

-
- 最終更新 2014年9月12日 (金) 10:59 (日時は個人設定で未設定ならば UTC)。
 - テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。

加納久宜

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

加納 久宜（かのう ひさよし、嘉永元年3月19日（1848年4月22日） - 大正8年（1919年）2月26日）は、幕末の上総国一宮藩主、明治・大正時代の政治家である。子爵。鹿児島県知事、千葉県一宮町長、貴族院議員。十五銀行取締役。日本体育会会長、日本体育会体操学校（現日本体育大学）校長。全国農事会幹事長、帝国農会初代会長。産業組合中央会副会長。日本競馬会創設に尽力、「日本農政の父」と仰がれる。



加納久宜

目次

- 1 経歴
- 2 家族
- 3 脚注
- 4 参考文献
- 5 関連項目
- 6 外部リンク

経歴

立花種道（下手渡藩（筑後三池藩）主・立花種周の五男）の三男として生まれる。幼名は嘉元次郎。安政2年（1855年）の安政江戸大地震で、本所の下屋敷が倒壊して下敷きとなり、自身は助けだされるが両親を亡くす。宗家立花氏の養子に入っていた深川の実兄立花種恭（幼名・鐘之介）に引き取られる。兄・種恭に読書、習字、弓術の指導を受けるとともに、剣術は小谷精一郎、馬術は大坪本流磐井槍吉の指南を受けた。老中格で幕閣参政として軍制改革に取り組む兄の影響を受け、フランス兵学に興味を持ち、佐久間象山の高弟・蟻川功に師事して兵学を学ぶ。

慶応2年（1866年）、上総一宮藩主・加納久恒が急死したのを受けて急遽養子となり、19歳で藩主となる。新政府軍は主にイギリスから、列藩同盟軍は主にドイツから、軍事教練や武器供与などの援助を受けていたこともあり、国入り早々近習の侍を集めてフランス式操練を行った。折りしも鳥羽・伏見の戦いが始まると海路出陣、京都に向かうが、大時化などで伊豆下田で足止めとなり、間に合わなかった。

維新後の版籍奉還により一宮藩知事となり、廃藩置県で免職となる。留学に備えて大学南校(東京大学の前身、後の開成学校)でフランス語など西洋の社会・人文諸学を学ぶ。周囲の反対で留学を断念し、明治6年(1873年)文部省督学局に出仕した後、岩手県師範学校初代校長、全国一の規模を持つ新潟学校長を歴任する。明治14年(1881年)には司法界に転じて熊谷始審裁判所長、大審院検事、東京控訴院検事などを務める。

明治17年(1884年)、子爵を授爵する。

明治22年(1889年)、大日本帝国憲法の発布、議院法と貴族院令が公布されると、上院(貴族院)において有爵者の任務を研究する「子爵同志研鑽会」の発足にかかわった。明治23年(1890年)、子爵の互選により兄の種恭とともに帝国議会貴族院子爵議員に選出され、明治30年(1897年)7月まで務める。第1回議会(明治23年(1890年))では弁護士法委員、両院交渉事務規定特別委員に選出されている。第2回議会(明治24年(1891年))では予算委員(第二科 外務省・司法省)、帰化法案特別委員に選出されている。会派が形成される以前であったが、積極的に会合(「同士会」(加納有志会))を定期的(月2回)にもっている。その後、侯爵中山孝麿が中心となっているグループ(有志者会)と合併するがやがて脱退し、無所属となった。

明治27年(1894年)1月20日、鹿児島県知事に就任^[1]。同年、内村鑑三、新渡戸稲造と東京英語学校で同学で、札幌農学校に学んだ岩崎行親を知事顧問として招聘し、不偏不党の方針を掲げ農業、水産、土木、教育の諸事業に積極的に取り組んだ。農会の設置と系統化を通じた農業の近代化と生産力の向上に努め、米の生産量を75%増収し、みかんやお茶などの特産品を奨励した。鹿児島鉄道の新設、鹿児島港の近代化、道路などインフラ整備にも尽力し、おおきな成果を挙げる。教育の面でも、全国に先駆け、小学校の授業料を無料化し、遅れていた就学率を男女とも全国のトップレベルに引き上げた他、中学校の増設、高等学校(現鹿児島大学)の創設などに努めた。知事の肩書きにとらわれず、私財を投じ自ら先頭に立つ姿勢、気さくな性格とあいまって、県民から親のように慕われた。西南戦争により無気力化していた鹿児島県を近代化に導き、その基礎を築いた知事として、高い評価を受ける。明治33年(1900年)9月8日に知事を休職^[2]。明治36年(1903年)9月7日、休職満期となり退官した^[3]。

鹿児島県知事を退任すると、東京都入新井村に居住した。ここでは、学務委員として地域の教育振興にも努め、明治35年(1902年)7月、英国の協同組合を見本に、大森山王の自邸を事務所にして、妻と2人で手作りで帳簿を揃えて、都内最古の入新井信用組合(現:城南信用金庫入新井支店)を設立し、荒廃していた地域を模範村にかえていき、村民から慕われる。同時期の明治35年(1902年)、鹿児島県での実績から全国農事会幹事長に就任し、農業生産の拡大に尽力する。その後、帝国農会初代会長に就任するなど、全国の農政にも深く関与する。一方で、入新井信用組合の運営者として全国に信用組合の模範を示し、全国農事会の幹事長の立場でも産業組合運動の普及宣伝にも情熱を注ぎ、全国を遊説し、その普及活動に努める。明治38年(1905年)には、産業組合運動の振興のため、入新井信用組合と全国農事会の主催により、全国産業組合役員協議会(後の全国産業組合大会)を開催し、自ら座長を務める。同年、大日本産業組合中央会副会頭に就任する(会頭は平田東助)。こうした活動で「産業組合の育ての親」と称される。

明治37年(1904年)、日本体育会(体操学校・現日本体育大学)会長(校長)として荏原中学(現在の日体荏原高等学校)を設立する。同年7月、再度、貴族院子爵議員に選出され、死去するまで在任する。

明治39年(1906年)、安田伊左衛門などとともに東京競馬会の発足に尽力する。日本人による初の馬券付き競馬を、東京大森の池上競馬場にて開催する。明治43年(1910年)には、東京競馬会・日本競馬会・京浜競馬倶楽部・東京ジョッキー倶楽部を統合して東京競馬倶楽部が設立され、初代会長に就任する。

明治45年(1912年)に清浦内閣成立の折には、農商務省大臣就任が要望されたが、地元一宮町民の熱望により一宮町長に就任する。その任期中、特に農業畜産の振興、耕地整理による基盤整備、名士の別荘招致、海水浴場創設と植林、青年会等各種団体の育成、一宮女学校開設、他多数の事業を力強く推進した。

大正6年(1917年)、町長退任後も名誉町長格で毎日役場に出勤していた。同年、一宮町の農業青年70人を率いた大視察団とともに鹿児島県を訪れる。鹿児島入りしたときは、駅頭黒山の歓迎陣で埋まった。最初に発した言葉は「昔植えたミカンを早く見たい」であった。

大正8年(1919年)2月26日、避寒療養先の大分県で亡くなる。「地方自治の恩人 加納子逝く一昨夜別府で享年七十有四」と『東京日日新聞』(2月28日)は報じている。葬儀は3月6日、東京谷中斎場で行われ、加納家墓地に葬られる。遺言は「一にも公益事業、二にも公益事業、ただ公益事業に尽くせ」。晩年の家庭の話題は鹿児島のことばかりで「もし我輩が亡くなっても鹿児島のことまで話があったら冥土に電話せい」が口癖であったという。

大正11年(1922年)には偉業、威徳を慕う一宮町民多数の懇請により、町を見下ろす城山に分骨を納めた「加納久宜公の墓」が建立されている。墓前には、昭和18年(1943年)に鹿児島県知事加納久宜顕彰会からの寄贈による薩摩風石灯籠一対もある。町民の要望により、分骨されている。

昭和18年(1943年)に鹿児島県では記念行事が催され、また加納知事顕彰会より鹿児島県庁跡に記念碑が建てられ、一宮町の墓に薩摩灯籠が奉納されている。

官位は従二位勲二等子爵、遠江守。

家族

- 実父:立花種道
- 実兄:立花種恭
- 養父:加納久恒(上総一宮藩主)
- 正室:大久保教義の娘
- 継室:原三蔭の娘
- 長男:加納久元
- 二男:加納久朗(日本住宅公団初代総裁 千葉県知事)
- 三男:加納久憲

- 長女: 嘉子(夭折)
 - 二女: 冲子(陸軍中将・武田三郎室)
 - 三女: 国子(子爵・阿野季忠室)
 - 四女: 八重子(地質学者、実業家・野田勢次郎室)
 - 五女: 治子(内務大臣・後藤文夫室)
 - 六女: 夏子(実業家・麻生太郎室)
- 橋本龍太郎の妻・久美子、麻生太郎、作家・野田昌宏は曾孫に当たる。

脚注

1. ^ 『官報』第3167号、明治27年1月22日。
2. ^ 『官報』第5158号、明治33年9月10日。
3. ^ 『官報』第6058号、明治36年9月9日。

参考文献

- 『鹿児島県の勸業知事 加納久宜小伝』 編者 加納知事五十年祭奉納会 著者 大園純也 春苑堂書店1969年。
- 『加納久宜 鹿児島を蘇らせた男』大園純也著 高城書房 2004年。
- 『加納久宜集』松尾れい子編 富山房インターナショナル 2012年。
- 『議会制度百年史 - 貴族院・参議院議員名鑑』衆議院・参議院編 1990年。

関連項目

- 加納久通
- 立花種道
- 立花種恭
- 城南信用金庫

外部リンク

- かごしまの概要 - 歴史・文化 - 近代・現代 (http://www.pref.kagoshima.jp/ab23/pr/gaiyou/rekishi/kindai/kanotiji.html)
- 千葉県一宮町 - 一宮町指定史跡 - 加納久宜公の墓 (http://www.town.ichinomiya.chiba.jp/kankou/kankouannai/bunkazai/machisi)
- 大田区報 散歩日和 加納久宜公遺徳碑 (http://www.city.ota.tokyo.jp/kuho/kuho_pdf/kuhou_110901.files/0901-p8.pdf)
- 大田区八景園 加納久宜子爵邸跡 (https://www.city.ota.tokyo.jp/shisetsu/rekishi/sannou/hakkeien_ato.html)
- 城南信用金庫 加納久宜 (http://www.jsbank.co.jp/8/1-8-5.html)
- 日体荏原高校 (http://www.nittai-ebara.jp/about/history/)
- 駒込文士村 大森倶楽部について (http://www.magome-bunshimura.jp/modules/contents15/index.php?id=4)

- 東京馬主協会 東京馬主協会のあゆみ
(<http://www.toa.or.jp/about/history.html>)
- 加納久宜公研究会 リンク集 (<http://www.kanou138.com/link1.html>)

「<http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=加納久宜&oldid=52106427>」から取得

カテゴリ: [立花氏](#) | [加納氏](#) | [一宮藩主](#) | [幕末の大名](#) | [貴族院子爵議員](#)
| [鹿児島県知事](#) | [千葉県の市町村長](#) | [帝国農会の人物](#) | [幕末三池藩の人物](#)
| [1848年生](#) | [1919年没](#)

-
- 最終更新 2014年6月27日 (金) 10:58 (日時は個人設定で未設定ならば UTC)。
 - テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。

堀口大學

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』



この記事は検証可能な参考文献や出典が全く示されていないか、不十分です。出典を追加して記事の信頼性向上にご協力ください。(2013年3月)

堀口 大學 (ほりぐち だいがく、1892年(明治25年)1月8日 - 1981年(昭和56年)3月15日)は、明治から昭和にかけての詩人、歌人、フランス文学者。訳詩書は三百点を超え、日本の近代詩に多大な影響を与えた。雅号は十三日月。葉山町名誉町民。

堀口 大學 (ほりぐち だいがく)



ペンネーム	十三日月
誕生	1892年1月8日
	● 日本・東京府東京市本郷区 (現・文京区)
死没	1981年3月15日 (満89歳没)
墓地	● 日本・鎌倉霊園
職業	詩人・歌人・翻訳家
言語	日本語
国籍	● 日本
最終学歴	慶應義塾大学文学部予科中退
活動期間	1918年 - 1980年
ジャンル	詩・翻訳・文芸評論

目次

- 1 経歴
 - 1.1 学生時代
 - 1.2 外遊
 - 1.3 帰国後の詩作活動
 - 1.4 戦後
- 2 人物
- 3 著書
 - 3.1 詩集・歌集
 - 3.2 評論・随筆
 - 3.3 翻訳
- 4 回想・伝記
- 5 参考文献
- 6 関連項目
- 7 脚注
- 8 外部リンク

経歴

学生時代


1892年(明治25年)、東京帝大在学(1891年)の堀口九萬一(のち外交官)の長男として、東京市・本郷区森川町に生まれる。父は戊辰戦争で戦死した長岡藩士・堀口良治右衛門の長男で、母は村上藩士江坂氏の長女である。大学という名前は、出生時に父が大学生だったことと、出生地が東京帝国大学の近所であることに由来する。日清戦争開始により、父が仁川領事館補として朝鮮に単身赴任するにあたり、新潟県古志郡長岡町(現・長岡市)に引き揚げる。

母が23歳で早世したこともあり、以後は祖母に育てられる。父は関妃暗殺事件に連座して失脚し、後事を京城在任以来の知己である与謝野鉄幹に託した。1898年(明治31年)長岡町立坂之上尋常高等小学校に入学。復職してオランダに在住していた父の指導により、日本牧師の指導で英学を始める。1904年(明治37年)2月日露戦争、4月旧制長岡中学校に入学。この頃から文学に魅かれ、内藤鳴雪の俳句に心酔。同級に松岡譲が居た。

1909年(明治42年)に上京し、好んで谷中墓地を逍遥して短歌を詠み、『スバル』を読んで明星派短歌に魅了され、十三日月の雅号で詠草が一二月号に掲載される。9月に「新詩社」に入社。1910年(明治43年)慶應義塾大学文学部予科に入学。与謝野鉄幹の永井荷風への推薦もあって知遇を得、『三田文学』に詩歌の発表を始める。この頃から、同門の佐藤春夫とは終生の友人であった。予科の教師はベルグソン哲学の訳者の広瀬哲士で、学年末のフランス語成績は「不可」であった。翌年に予科2年に進級するが、父の任地メキシコに赴くため、慶大を中退。

外遊

東洋汽船会社の香港丸で横浜を出帆し、メキシコの日本公使館に在ること1年。この頃、肺結核を患う。父の後妻がベルギー人で、家庭の通用語がフランス語だったためフランス語の習得に没頭し、パルナシアン(パルナシアン)の詩を読み始める。この時、メキシコ革命に遭遇。マデロ大統領失脚、謀殺までの『悲劇の二週間』を体験する。1913年(大正2年)にシベリア経由でベルギーに向かい、ランボーをピストルで撃ったヴェルレーヌの事件を

文学活動	象徴主義 ダダイズム 高踏派
代表作	『月光とピエロ』(1908年) 『月下の一群』(1925年、訳詩集) 『夕の虹』(1958年)
主な受賞歴	読売文学賞(1959年) 勲三等瑞宝章(1967年) 新潟総合テレビ文化賞(1973年) 勲二等瑞宝章(1974年) 文化勲章(1979年)
処女作	『昨日の花』(1918年)
影響を受けたもの	内藤鳴雪 与謝野晶子
影響を与えたもの	中原中也 新感覚派
	 ウィキポータル 文学

担当した裁判官シャルル・リグール家に住み、10月には当時の日銀総裁・水町袈裟六の斡旋でベルギー国立銀行に日本銀行の委託研究生として勤務し、異例の待遇を受けた。

詩的にはポール・ヴェルレーヌ、サンボリスム詩への傾倒が始まり、詞華集『今日の詩人』でRemy de Gourmontの詩を読み、「一生を通じての精神上の最大の事件」^[1]といえる決定的な影響を受ける。以後も父の任地に従い、ベルギー、スペイン、スイス、パリ、ブラジル、ルーマニアと、青春期を日本と海外の間を往復して過ごす。スペイン滞在時はマドリード日本公使館で、マリー・ローランサンと交歓しギヨーム・アポリネールを教えられる。スイスで療養したサナトリウムは、トーマス・マン『魔の山』の舞台になったところである。

1917年(大正6年)に外交官試験のために帰国し、日夏耿之介、柳沢健、長谷川潔を知る。第一次論文選考、第二次筆記試験には合格したものの口述試験で病弱のため採用されず、外交官への道を断念する。翌年に浅野合名会社嘱託通弁となり、永井荷風が序文を担当して最初の著書『昨日の花』を自費出版。リオデジャネイロから『三田文学』『炬火』に寄稿。1919年(大正8年)、処女詩集『月光とピエロ』(永井荷風序文)、処女歌集『パンの笛』(与謝野鉄幹、与謝野晶子序文)を刊行。以後、ブラジルのパイア、ペルナンブーコ州、リオ、サンパウロ、サントスやアルゼンチン、ウルグアイに滞在し多数の出版を手がける。ウルグアイではジュール・シュペルヴィエルを知る。その仕事は作詩、作歌にとどまらず、評論、エッセイ、随筆、研究、翻訳と多方面に及び、生涯に刊行された著書は、300点を超える。

1923年(大正12年)ルーマニアに向かい、船中でポール・モランの『夜をひらく』を訳し、パリにモランを訪ね翻訳出版の快諾を得、長谷川潔や鈴木竜二らと再会し、藤田嗣治やアンドレ・サルモンらと交友を持つ。1925年(大正14年)に帰国。

帰国後の詩作活動

彼の斬新な訳文は当時の文学青年に多大な影響を与え、特に新感覚派運動の誘因となった。帰国後に文化学院大学部でフランス近代詩を講ずる。以後、ヴェルレーヌの研究評伝を手がけ、戯曲訳にも手を染め、ジャン・コクトーをはじめ、一家十三篇を訳す。1928年(昭和3年)日夏耿之介、西條八十との共同編集で詩誌『パンテオン』を創刊。岩佐東一郎、青柳瑞穂、城左門、田中冬二、矢野目源一、熊田精華らの若い詩人が集う。4月に文化学院を辞任。しかし、翌年に日夏耿之介との確執が起き、決別し『パンテオン』が廃刊。自ら後継詩誌『オルフェオン』を第一書房から創刊し、新たに菱山修三が加入し、機知感覚の詩風は、シュルレアリスム詩『詩と詩論』と共に詩壇に新風を与えた。

1932年(昭和7年)小石川区に居を構え、6月に『昼顔』を発行するが発禁処分となる。1935年(昭和10年)に日本ペンクラブの副会長に推される(会長・島崎藤村)、文芸誌『若草』の詩選を担当し、京都の『時世粧』の編纂人となる。翌年5月にジャン・コクトーが来日した際は帝国ホテルに同宿して歌舞伎などを案内^[2]。国家総動員法の公布に伴い、日本学者のジョルジュ・ボノーと野尻湖畔のレーキサイドホテルにこもり、仏訳に専心した。しかし、著書が情報局検閲で削除されるなど思想弾圧を受けた。1941年(昭

和16年)に静岡県興津に疎開。翌年に師・与謝野晶子が死去し、青山で挽歌十首を捧げた。1945年(昭和20年)に被爆下の静岡を脱出し、新潟県妙高山麓(旧関川村)の実家に再疎開。1945年秋には父が亡くなり故郷で葬った。

戦後

1947年(昭和22年)に詩集五冊を上梓したのを皮切りに、著作活動を再開し、翌年に東郷豊治と西蒲原郡の旧家を訪ね、良寛の遺墨を観る。1950年(昭和25年)に、疎開から引き揚げて以降は、神奈川県湘南の葉山町に終生在住した。白水社の草野貞之の知遇により、シャルル・ボードレールの『悪の華』を全訳。

1957年(昭和32年)に日本芸術院会員。9月に国際ペン大会会長として来日したAndre Chamsonと会談。1959年『夕の虹』にて第10回読売文学賞を受賞。日本現代詩人会の「詩祭」で顕彰され、上司海雲と東郷豊治の案内で、秋篠寺、唐招提寺、薬師寺などを参観。ほか日本全国を旅し、室生犀星詩集賞や読売文学賞選考委員となる。

1967年(昭和42年)、宮中歌会始で召人、(お題は「魚」)「深海魚光に遠く住むものはつひにまなこも失ふとあり」と詠んだ。生物学者である昭和天皇はたいそう喜んだというが、また一部には、天皇本人を目の前にしての批判(諫言)であると解する向きもある。4月に勲三等瑞宝章を受章。

1970年(昭和45年)日本詩人クラブ名誉会員。日本万国博「日本の日」に式典歌として作詞した「日本新頌」「富士山点描」を発表し、11月に文化功労者。翌年、日本現代詩人会名誉会員。1973年(昭和48年)10月に新潟総合テレビ文化賞。岩佐東一郎の葬儀に参列し、翌年に勲二等瑞宝章。1975年(昭和50年)に父の漢詩に和訓を付し、年譜を添えた『長城詩沙』を上木し、宿願を果たした。1979年(昭和54年)に文化勲章を受章。東大寺落慶法要式典歌作詞のため、奈良へ取材旅行。1981年3月に歿。享年89。

葉山町神社境内「人に」、栃木県竜王峡「石」、上越市「高田に残す」の詩碑が建立されている。

人物

- 三島由紀夫もまた、大學訳によるラディゲ『ドルジェル伯の舞踏会』に多大な影響を受けた一人である^[3]。
- 疎開に際し古本屋に、父のものも含め売却した蔵書の豪華さは、荷風『断腸亭日乗』や、中村真一郎の回想エッセーに記されている。大學自身は、「あれを売ったお金で、田舎に隠れて(中略)何もしないで遊んで暮らし」と述べた^[4]。

著書

- 堀口大學全集 全9巻+補巻3+別巻1 (小澤書店) 1981年-88年

小澤書店は2000年に倒産したが、日本図書センターで2001年に復刻された。^[5]

詩集・歌集

一覧

- 月光とピエロ 初山書店(1919年)
- パンの笛 歌集 初山書店(1919年)
- 水の面に書いて 初山書店(1921年)
- 月夜の園 抒情小曲 玄文社(1922年)
- 新しき小径 アルス(1922年)
- 遠き薔薇 新潮社(1923年)
- 砂の枕 第一書房(1926年)
- 堀口大学詩集 第一書房(1928年)
- 男ごころ 歌集 第一書房(1929年)
- 涙の念珠 歌集 昭森社(1936年)
- 人間の歌 宝文館(1947年)
- 詩集乳房 岡本太郎画 ロゴス 1947
- 冬心抄 詩・歌・訳詩 斎藤書店 1947
- 雪国にて 柏書院 1947
- 白い花束 詩と随筆 草原書房 1948
- 夕の虹 昭森社 1957
- 飛花落葉抄 白鳳社 1969
- 堀口大学全詩集 筑摩書房 1970
- 幻露抄 堀口大学詩集 茗溪堂 1971
- 月かげの虹 筑摩書房 1971
- 朱唇紅臉抄 堀口大学詩集 松本和男編 茗溪堂 1973
- 虹の花粉 落谷虹児画 大門出版美術出版部 1973
- 堀口大学詩集 白鳳社 1975
- 東天の虹 詩集 弥生書房 1976
- 遠かそけく 堀口大学詩集 沖積舎 1976
- 水かがみ 昭和出版 1977
- 消えがての虹 詩集 小沢書店 1978
- 富士山 米寿記念詩集 へっど・あ-と 1979
- 堀口大学詩集 <現代詩文庫1019>
- 堀口大学訳詩集 <現代詩文庫1020> 思潮社・新書版 1980年
- 堀口大学詩集 那珂太郎編 弥生書房<世界の詩> 1980
- 幸福のパン種 堀口大学詩集 堀口すみれ子編 かまくら春秋社 1993

評論・随筆

- ヴェルレエヌ 世界文学大綱 東方出版 1927
- 註と解 仏蘭西現代詩の読み方 第一書房 1932
- 季節と詩心 随筆集、第一書房1935、のち講談社文芸文庫
- 山巔の気 生活社 1945
- 詩と詩人 講談社 1948
- ヴェルレエヌ研究 昭森社 1948
- 饗宴にエロスを招いて 昭森社 1960
- 捨菜籠 随筆集 弥生書房 1972
- 秋黄昏 河出書房新社 1980

翻訳

葉燭・葉楓

- 昨日の花 仏蘭西近代詩 昶山書店(1918年)
- 水色の目 天佑社(1920年)
- サマン選集 アルス (1921年)
- 沙上の足跡 箴言集 ルミド・グルモン 東京堂 (1922年)
- シヤルル・ルキ・フィリップ短篇集 近代文明社 (1923年)
- 燃え上る青春 アンリ・ド・レニエー 新潮社 1924 のち同文庫
- ポール・モーラン「夜ひらく」新潮社 1924 のち角川文庫
- 月下の一群 第一書房 1925、新編1928 白水社 1952。初版復刻、日本近代文学館ほか

のち新潮文庫、講談社文芸文庫 1996、岩波文庫 2013.5。で再刊

- 動物詩集 又の名・オルフェさまのお供の衆 ギイオム・アポリネール 第一書房 1925
- 科学の奇蹟 キネマ新話 ジュル・ロオメエン 第一書房 1925
- 聖母の曲芸師 現代仏蘭西短篇集 至上社 1925
- 夜とざす ポール・モオラン 新潮社 1925
- レキスとイレエン ポール・モオラン 第一書房 1925
- 恋の欧羅巴 ポール・モオラン 第一書房 1925
- 空しき花束 訳詩集 第一書房 1926
- マリヤヌの気紛れ ミユッセ、タンタチイルの死、ペレアスとメリザンド メエテルリンク 近代劇全集 第一書房 1927
- ヴェルレエヌ詩抄 第一書房 1927「ヴェルレエヌ詩集」新潮文庫
- アポリネール詩抄 第一書房 1928「アポリネール詩集」新潮文庫
- グウルモン詩抄 第一書房 1928「グウルモン詩集」新潮文庫
- 死市 ダヌンチオ 近代劇全集第35巻 第一書房 1928
- 三人女 ポール・モオラン 第一書房 1928
- 夜ひらく・夜とざす ポール・モオラン 旧新潮文庫 1929
- 詩人のなぶきん 仏蘭西短篇集 第一書房 1929 ちくま文庫 1992
- オルフェ 戯曲 ジャン・コクトオ 第一書房 1929
- ジャン・コクトオ詩抄 第一書房 1929
- 青白赤 訳詩集 第一書房 1930
- キュピドの箴 抒情訳詩集 太白社 1930
- 文学 ポール・ヴァレリイ詩論 第一書房 1930 角川文庫
- ジャック・マリタンへの手紙 ジャン・コクトオ 第一書房 1931
- 詩法 マツクス・ジャコブ 第一書房 1931
- パリュウド アンドレ・ジイド 第一書房 1931
- ドルチェル伯の舞踏会 ラデイゲ 白水社 1931 のち角川文庫、講談社文芸文庫
- 阿片 ジャン・コクトオ 第一書房 1932 のち角川文庫、東京創元社版全集
- 仇ごころ ヴァルリイ・ラルボオ 青柳瑞穂共訳 第一書房 1932
- 白紙 ジャン・コクトオ 第一書房 1932
- 昼顔 ジャック・ケッセル 第一書房 1932(発禁)のち新潮文庫
- ポオドレエル感想私録 第一書房 1933
- 一粒の麦もし死なずば 上巻 ジイド 第一書房 1933、のち完訳・新潮文庫ほか
- 彼女には肉体がある ルミド・グウルモン 裳鳥会 1934
- ドニイズ レイモン・ラデイゲ 日本限定版倶楽部 1934

- ポオルフォル詩抄 第一書房 1934
- 酔ひどれ船 アルチュール・ラムボオ 日本限定版倶楽部 1934
- 夜間飛行 アントワアヌ・ド・サン テクジュベリ 第一書房 1934 のち三笠書房・新潮文庫
- アンドレ・ワルテルの詩 ジイド 第一書房 1934
- 贋金つくりの日記 ジイド全集 第8巻 金星堂 1934
- 日本詩歌と外国語 テクニツクと翻訳 ジョルジュ・ボノオ 国際文化振興会 1935
- 文学雑考 ポオル・ヴァレリイ 第一書房 1935 「文学論」角川文庫
- 南方飛行便 サン・テクジュベリ 第一書房 1935 のち三笠書房・新潮文庫
- シヤベエル大佐 バルザック全集 河出書房 1935
- 一粒の麦もし死なずば 全訳 アンドレ・ジイド 第一書房 1935 のち新潮文庫
- わが青春記 ジャン・コクトオ 第一書房 1936
- 闘牛士 アンリ・ド・モンテルラン 第一書房 1936 のち新潮文庫
- マリイ・ロオランサン詩画集 昭森社 1936
- シュペルヴィエル詩抄 版画荘 1936 「シュペルヴィエル詩集」新潮文庫
- 山と風と太陽と泉 四つの要素 アンドレ・シヤンソン 第一書房 1936
- 新しき糧 アンドレ・ジイド 第一書房 1936 のち新潮文庫
- 僕の初旅世界一周 ジャン・コクトオ 第一書房 1937
- 嶮しき快癒 ジャン・ポオラン 伸展社 1937
- 馬來乙女の歌へる イヴァン・ゴル 版画荘 1937
- 孤児マリイ マルグリット・オオドウ 第一書房 1937 のち新潮文庫
- 地上の糧 アンドレ・ジイド 第一書房 1937 のち角川文庫
- 女の学校 付・ロベエル アンドレ・ジイド 第一書房 1937 のち角川文庫
- ソヴェト紀行修正 アンドレ・ジイド 第一書房 1937
- 対話と言葉 グウルモン 第一書房 1938
- 光ほのか マルグリット・オオドウ 第一書房 1938 のち新潮文庫
- 田園交響楽・パリュウド アンドレ・ジイド 第一書房 1938
- ノアの方舟 シュペルヴィエル 第一書房 1939
- マリイの仕事場 マルグリット・オオドウ 第一書房 1939 のち角川文庫
- 人間の土地 サン・テクジュベリ 第一書房 1939 のち河出書房・新潮文庫
- 娘の嫉妬 フイリップ 新潮社 1939
- 街から風車場へ マルグリット・オオドウ 第一書房 1940
- 夢見るブウルジョア娘 上巻 ドリュウ・ラ・ロッシュェル 新潮社 1940 のち文庫
- 未完の告白 アンドレ・ジイド 第一書房 1941
- 現代ブラジル文学代表作選 第一書房 1941
- 強く生きんとて マルセル・アルラン 実業之日本社 1941
- 果樹園 ライナア・マリア・リルケ 青磁社 1942 のち角川文庫
- 檳榔樹 訳詩集 青磁社 1943
- 毛虫の舞踏会 青磁社 1943
- フランスの天才達 (正統) アナトール・フランス 第一書房 1943-44
- 戦ふ操縦士 サン・テクジュベリ 河出書房 1945
- 架空会見記 アンドレ・ジイド 鎌倉文庫 1946
- 情熱の波 ポール・モーラン 岡倉書房 1946
- 悪の華詩抄 シャルル・ポオドレエル 操書房 1947
- セシルの恋 エドモン・ジャルウ 斎藤書店 1947 「セシル夫人の恋」角川文庫
- 十三本目の木 ジイド 斎藤書店 1947
- ポオドレエル詩集 講談社 1949

- ランボオ詩集 新潮社 1949 のち文庫
- 無駄奉公 モンテルラン 新潮社 1950
- 赤裸の心・覚書 ボオドレエル 創芸社 1950
- フランス詩集 創藝社(1951年)
- 善の悪魔 アンリ・ド・モンテルラン 新潮社 1951 のち文庫
- 悪の華 ボードレール 白水社, 1951 のち新潮文庫
- 女性への憐憫 アンリ・ド・モンテルラン 新潮社, 1951 のち文庫
- ジャム詩集 新潮文庫 1951
- ランボオ詩集 新潮文庫 1951
- コクトオ詩集 アンリ・パリソ編 創元社, 1951 のち新潮文庫
- 幸福の後にくるもの 第1-4巻 ケッセル 新潮社, 1951-52 のち文庫
- 芸術論 ジャン・コクトオ 佐藤朔共訳 人文書院, 1952
- 花のノートルダム ジャン・ジュネ 新潮社 1953 のち文庫、〈全集〉
- ビュビュ・ド・モンパルナス シャルル・ルイ・フィリップ 新潮文庫 1954
- 誘惑者 上下 ジャン・マリー・カプラン 人文書院, 1954-55
- 青い麦 コレット 新潮社 1954 のち文庫
- 海軟風 訳詩集 新潮社 1954
- 沙漠のバラの恋物語 モンテルラン 新潮社 1955
- 恋路 ケッセル 新潮社, 1955
- 薔薇の奇蹟 ジャン・ジュネ 新潮社 1956、のち文庫、〈全集〉
- ミツの初恋 娘達は どうして女になるか コレット 角川小説新書 1956
- 黄色い部屋の秘密 ガストン・ルルウ 新潮社 1956 のち文庫
- モンパルナスの夜 ジョルジュ・シムノン 新潮社 1956 (探偵小説文庫)
- カルメン メリメ 新潮文庫 1956、1972、新版2006
- オデットの男友だち サン・ローラン 新潮社 1956 (愛の小説叢書)
- 見るもの 食うもの 愛するもの ヘそまがりのフランス探訪 ピエール・ダニノス 新潮社 1958
- 1/4秒に生きる男 ポール・モーラン 講談社, 1958
- 813 ルパン傑作集 第1 モーリス・ルブラン 新潮文庫 1959
- 続813 ルパン傑作集 第2 ルブラン 新潮文庫 1959
- 奇岩城 ルパン傑作集 第3 ルブラン 新潮文庫 1959
- 或る男の首 ジョルジュ・シムノン 新潮文庫 1959
- 思考の表裏 ポール・ヴァレリイ、アンドレ・ブルトン、ポール・エリュアル 昭森社 1959
- 強盗紳士 ルパン傑作集 第4 ルブラン 新潮文庫 1960
- ルパン対ホームズ ルパン傑作集 第5 ルブラン 新潮文庫 1960
- 水晶柱 ルパン傑作集 第6 ルブラン 新潮文庫 1960
- バーネット探偵社 ルパン傑作集 第7 ルブラン 新潮文庫 1960
- 青い鳥 メーテルリンク 新潮文庫 1960
- 八点鐘 ルパン傑作集 第8 ルブラン 新潮文庫 1961
- ルパンの告白 ルパン傑作集 第9 ルブラン 新潮文庫 1961
- 棺桶島 ルパン傑作集 第10 ルブラン 新潮文庫 1964
- ドン・キホーテ セルバンテス 新潮社 1965
- タマンゴ・エトリュスクの壺 メリメ 新潮文庫 1966、「カルメン」合本1972、改版2006
- 宿なしジャンの歌 一より九まで イヴァン・ゴル プレス・ビブリオマーヌ 1967
- 幽明抄 ジャン・コクトー 昭森社 1968
- 鴛鴦集 イヴァン・ゴル、クレール・ゴル詩抄 白鳳社 1969

- 恋愛 箴言集 ポール・レオター プレス・ビブリオマーヌ 1971
- アポリネール遺稿詩篇 昭森社 1972
- デスノス詩集 弥生書房 1978
- 乳房新抄 ラモン短篇30 ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ プレス・ビブリオマーヌ 1980
- ジュール・シュペルヴィエル抄 小澤書店 1991

回想・伝記

- 堀口すみれ子『父の形見草 堀口大学と私』(文化出版局 1991年)^[6]
 - 『虹の館 父・堀口大学の思い出』(かまくら春秋社 1987年、新版1992年)、写真多数
- 関容子『日本の鶯 堀口大学聞書き』角川書店、1980年→講談社文庫、1984年→岩波現代文庫、2010年12月
- 『思い出の堀口大学』(別冊かまくら春秋、1987年) - 多数の関係者による回想
- 工藤美代子『黄昏の詩人 堀口大学とその父のこと』(マガジンハウス、2001年)
- 長谷川郁夫『堀口大學 詩は一生の長い道』(河出書房新社、2009年12月) - 晩年交流があり回想にして、前半生までを描く大著の伝記。21世紀初頭から『季刊 三田文學』に断続的に連載。

参考文献

- 『堀口大學詩集』白鳳社 1967年 平田文也編 ISBN 4826219164

関連項目

- 長高三傑 - 山本五十六、堀口大學、井上円了

脚注

- ↑ 平田(1967年)P133
- ↑ 西川正也『コクトー、1936年の日本を歩く』(中央公論新社、2004年)に詳しい。
- ↑ 三島由紀夫「一冊の本——ラディゲ『ドルジェル伯の舞踏会』」(朝日新聞 1963年12月1日号に掲載)
- ↑ 中村真一郎『緑色の時間のなかで』、107-110頁に収録。(筑摩書房、1989年)
- ↑ なお翻訳は、膨大なため初期を主とした選集である。
- ↑ 娘で詩人・エッセイスト。なお兄は若くして、不慮の事故で亡くなっている。

外部リンク

- 長岡市立中央図書館 (<http://www.lib.city.nagaoka.niigata.jp/index.html>)-堀口大學コレクションを所蔵
- 堀口大學 (<http://www.geocities.jp/scaffale00410/daigakutop.htm>)-どの詩に誰が作曲したか

- 堀口大学 (<http://www.choryo.jorne.ed.jp/area/horiguchi.html>)
- 長岡ゆかりの詩人 堀口大學 生誕120年展 (<http://www.lib.city.nagaoka.niigata.jp/news/h23/0912horiguchi/0912horiguc>)
- 堀口大學|鎌倉市 (<http://www.city.kamakura.kanagawa.jp/bunka/bunjinroku/horiguch.html>)

「<http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=堀口大學&oldid=52728157>」から取得

カテゴリ: 日本の詩人 | 歌人 | 日本の文学研究者 | フランス文学者 | 日本の翻訳家
 文化勲章受章者 | 日本藝術院会員 | 日本ペンクラブ会員 | 日本銀行の人物
 ダダイズム | 東京都出身の人物 | 1892年生 | 1981年没

- 最終更新 2014年8月30日 (土) 04:03 (日時は個人設定で未設定ならば UTC)。
- テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。

参考文献

堀口大學 平田文田 著 ISBN 4826219164

目録

序 高島三郎 堀口大學、山本正十、井上土

脚注

- ↑ 平田 (1987年) p133
- ↑ 西川 正也 (1938年) 『日本の詩人』、中央公論社 (2004年) に収録
- ↑ 三島由紀夫 『第一冊』 『現代文壇』、朝日新聞社 (1963年) 12月10日号 (雑誌) に収録
- ↑ 中村 真一 『戦時下の詩壇』、岩波書店 (1989年) に収録
- ↑ 大淵 寛 『大淵寛の詩論』、岩波書店 (1989年) に収録
- ↑ 堀口 大學 『堀口大學』、岩波書店 (1989年) に収録

外部リンク

- 長岡市立中央図書館 (<http://www.lib.city.nagaoka.niigata.jp/index.html>) - 堀口大學 に関する資料
- 堀口大學 (<http://www.geocities.jp/scarf00410/baigaku.htm>) - 詩人としての堀口大學